

令和6年6月11日

○甲南女子大学研究紀要

投稿要領・執筆要領

【投稿要領】

学部 of 投稿規準が定められている場合は、それを遵守すること。

本誌に投稿を希望するものは、あらかじめ編集委員会に指定された方法で投稿予定申込みを行うこと。

1. 投稿原稿は、和文または欧文によるものとする。原稿枚数はレイアウトされた原稿の頁数で換算することとし、表題、本文（図版含む）、注、参考文献などを含めて、A4判で12-20頁とする。
2. 投稿原稿の数に関して、単著の場合は1人1本までとし、連名による原稿に限って、さらに1本提出することができる。連名による原稿の場合は1人2本までとする。
3. 連名による投稿論文の筆頭著者は本学専任教職員以外でもよい。
4. 投稿論文に利用したデータや事例などについて、研究倫理上必要な手続きを経ていることを本文中などに明記すること。
5. 投稿した原稿と同一内容、もしくはその中核部分が同一とみなせる原稿は、他の紀要や学会誌などに重ねて投稿してはならない。
6. 投稿原稿は、特別の事情がない限り Microsoft Word を用いて作成し、執筆要領に従ってレイアウトされた原稿とすること。
7. プリントアウト原稿1部と投稿原稿のデータ及び「投稿申込書」を所定の期日までに下記に提出すること。

〒658-0001 兵庫県神戸市東灘区森北町6-2-23

甲南女子大学図書館気付

『甲南女子大学研究紀要』編集委員会

8. 抜き刷りの印刷費用は当該原稿執筆者の負担となる場合がある。当面は1論文につき20部までは無料配布（モノクロ）とする。

※甲南女子大学学術研究リポジトリにおいて原則公開する。

甲南女子大学学術情報リポジトリに登録するものにはすべてDOIを付与する。

## 【執筆要領】

1. 本誌に掲載される論文等 1 篇の分量(日本語のタイトル・著者名・要旨、英語のタイトル・著者名・要旨 (Abstract)、キーワード、図表を含む)は、原則として次の通りとする。ただし、編集委員会が認める場合はこの限りではない。  
原著論文:25,000 字(20 ページ)以内  
研究報告、実践報告:20,000 字(15 ページ)以内  
総説、資料、その他:16,000 字(12 ページ)以内
2. 原稿は、Microsoft Word を用いて作成の上、指定された期限内に投稿を行う。なお本誌に掲載された書類等は返却しない。
3. 原稿は、サイズは A4 判、マージンは上下左右ともに 25mm、1 行 22 字、1 ページ 40 行の 2 段組みで、日本語は MS 明朝、英語は Century、ともに 10.5 ポイントで作成する。図表を挿入する場合、上に示した総頁数を越えないようにする。図版はカラー/モノクロともに可とする。
4. 提出の際には、原稿データ、プリントアウト原稿 1 部、「投稿申込書」を指定された期日までに提出する。
5. タイトルは日本語と英語で記載する。  
キーワードは 3~5 語を日本語と英語で記載する。  
英語のタイトル、キーワードに関しては、ネイティブもしくは同等の者の校閲を経たものとする。  
原著論文の場合はこれらにつづき、要旨 (Abstract) を記載してから本文を始める。  
要旨 (Abstract) の分量は、日本語で 400 字以下、英語で 200 語以下とする。
6. タイトルと要旨 (Abstract) の間に著者名とその所属を日本語と英語で記載する。  
著者が複数いる場合は、代表者名を筆頭に置き、日本語で全員分記載後、英語でも記載する。  
なお、著者の所属は論文の最後に列記する。つづけて、著者の E メールアドレスを記載してもよい。
7. 見出しは、横書き原稿はアラビア数字で番号を付す。縦書き原稿は原則として漢数字とする。各見出しの最後に一行改行を入れる。  
日本語は MS 明朝、英語は Century、ともに 10.5 ポイントとし、半角数字、ピリオド、全角スペース、見出しの順で統一する。  
(例) 1. オンライン授業について
8. 和文の場合、句読点は「、」「。」を用い、基本的には括弧は全角の丸括弧を用いる。ただし、括弧の前後が英数字や「,」「.」の場合は半角の丸括弧を用いる。  
(例) Konan ■ Women's ■ University (KWU), ■ Kobe ■ University  
↑ 半角スペース ↑ 半角丸括弧

9. 図及び表にはアラビア数字で連番を付し、簡潔な見出しをつける。

10. 本文中における参考文献を示す場合は、(著者名、刊行年)のように引用部の後に表示する。

複数の参考文献を同じ箇所に表示する場合は、(吉田、2013; 田中、2015) とする。

著者が2名の場合は、(鈴木・佐藤、2019) (Rowe & Pope, 2019) とし、3名以上の場合は、(吉田他 2019) (Rowe et. al. 2019) とする。

同一著者の同一刊行年の異なる文献を引用する場合は、刊行年の後にアルファベットを付して区別する。

(例) 2006a, 2006b, …

11. 註及び参考文献は、本文の末尾に一括して記載する。

本文中での註の指示は、上付きの連番で示す。括弧は付けない。

参考文献は、註の後に著者名の姓のアルファベット順で記載する。

また、参考文献の表記は原則として MLA(Modern Language Association/米国近代語学会)様式に従うこととする。

(本文レイアウト)

横書き(A4) 2段組

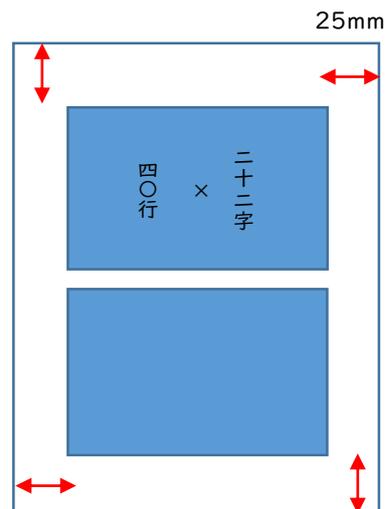
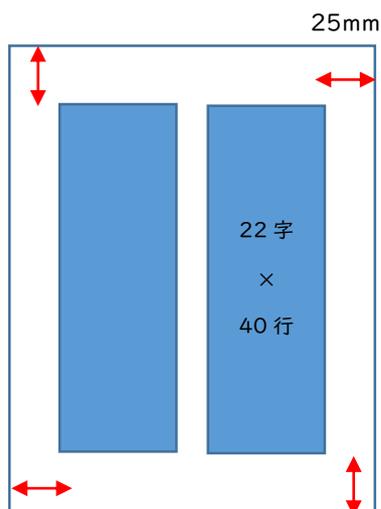
余白は上・下、左・右 25mm

1段あたり 22字×40行

縦書き(A4) 2段組

余白は上・下、左・右 25mm

1段あたり 22字×40行



## サンプル

## 『星の王子さま』を読む (3)

日本語タイトル

—「飼いならす」ことのレッスン—

芦田 徹郎

日本語著者名

Reading *Le Petit Prince* (3):  
Lesson of *Approvoiser*

英語タイトル

ASHIDA Tetsuro

英語著者名

**Abstract:** Chapter 21 of Saint-Exupéry's *The Little Prince* (*Le Petit Prince*) is one of the climaxes of the story. And, the theme of the dialogue between the little prince and the fox in this chapter, the verb "tame" (*approvoiser*) is one of the most important key words of the story. The fox, who preaches to the little prince of the importance of *taming*, does not seek *to tame* the little prince, but *to be tamed* by him. On the other hand, while the little prince wants to play with the fox, he refuses *to tame* him (although he eventually agrees), which is a condition set forth by the fox. I would like to carefully decipher what is meant by the inconsistent exchanges between the two over this important keyword.

英語要旨

**Key Words:** translation, triangulation, tame (*approvoiser*), unique in the word (*unique au monde*)

英語キーワード

**要旨:** サン=テグジュペリ著『星の王子さま』の第21章は、この物語のクライマックスの一つである。また、この章で繰り返し上げられる王子さまとキツネとの対話のテーマである「飼いならす」は、この物語のもっとも重要なキーワードの一つである。ところが、王子さまに「飼いならす」ことの大切さを説くキツネは、王子さまを飼いならそうとはせず、王子さまから「飼いならされる」ことを求める。王子さまも、キツネと遊んでもらうことを求めながら、キツネがその条件だという「飼いならす」ということをいったんは拒否する。重要なキーワードをめぐって繰り返し上げられる両者のちぐはぐなやり取りが意味するところを、ていねいに読み解いていきたい。

日本語要旨

**キーワード:** 翻訳, 三角測量, 飼いならす, 世界に一つだけ

日本語キーワード

## 本文

## 1. 翻訳を読む

私は、サン=テグジュペリの『星の王子さま』(*Le Petit Prince*, 1943) を、その言説相互の「関連性」と「呼応関係」に留意しつつ丹念に読むことで、テキスト内在的な考察を試みている。ただ、私は、その試行

制限のため十分なレファレンスを付けていないが、多くの邦訳書や解説書に頼っている。また、テキストの引用や言及にあたっては原語を付したところがあるが、当該箇所からの忠実な訳出というよりも、記述の根拠となる原文を指示しているにすぎない。

内藤濯による初訳(1953年)以来、『星の王子さま』に幼いころから接したという人は多い。また、推

## 参考文献

- 1)
- 2)

20) 甲南太郎 ○○○○○○

あしだ てつろう 甲南女子大学名誉教授

著者所属